

### 3) ヒマワリ=向日葵

ヒマワリはキク科の一年草で、原産地は北アメリカ、鑑賞用としてまた食用として広く栽培されている。茎は太く直立し高さ 2~3m、花は花径 10~40cm にも達する。学名は『*Helianthus annuus*』で、『helios』は太陽を、『anthos』は花を意味しており、種小辞は一年草のという意味である。和名の由来は太陽の向きに従って花が回るという「陽廻り」の意味であるが、実際には廻るようなことはない。しかし向日性は極めて強く、南に向いて花を開く。イギリスでもヒマワリを『sunflower』といい、フランスでは『herbe au soleil』という。『herbe』はいわゆるハーブで「草」という意味であり、『soleil』は太陽である。中国では日本と同じ『向日葵』で、別称としてはヒグルマ、ニチリンソウ、ハナグルマ、ヒノマルなどがある。

ヒマワリがヨーロッパに伝わったのは 16 世紀の中頃のことで、スペインの医師ニコラス・モナルデによってスペイン王立植物園にもたらされ、その後ヨーロッパに広がった。日本に伝わったのは 1666 年(寛文 6 年)のことで、ヨーロッパを經由して中国から入ったものと思われる。中国で 1616 年に刊行された『花史左編』(カシサヘン)には「丈菊」(ジョウギク)として記されており、日本にも「丈菊」として伝わり、1666 年に刊行された『訓蒙図彙』(キンモウズイ)には「丈菊、俗に言ふてんがいくわ(天蓋花)、一名迎陽花(ゲイヨウカ)」と記されている。また 1696 年の貝原益軒による『花譜』(カフ)には「ひふがあふい」(日向葵)「かうじつあふい」(向日葵)とあり、1709 年に著わされた『大和本草』(ヤマトホンゾウ)には「日まはりとも言ふ」とある。これが我が国における最初のヒマワリの記述で、その後 1695 年に伊藤三之丞によって著わされた『花壇地錦抄』(カダンチキンショウ)においても「日廻り」として記されている。

ヒマワリは日本においてはもっぱら鑑賞用であったが、この花を貝原益軒は「下品なり」と評している。もともとヒマワリは種子から植物脂肪をとる原料として栽培され、良質な油は製菓用としても、また調理用としても貴重なものだった。種子には脂肪の他に蛋白質を多く含み、炊って食用としたり、灯油や石鹼の原料にもされたのである。日本の食用油は古来より椿油やハシバミに依存し、中国ではゴマやダイズを用い、西アジアではアブラナを用いていた。他方ヨーロッパではオリーブを、南北アメリカではこのヒマワリを用いたわけで、どこの地方でも植物油は大事な産業だったから、花の美しさ以前に、この植物の価値は決まっていたということもできよう。

アメリカインディアンは種子から植物油を採ったほか、花卉からは黄色の染料をとり、茎の髄からは繊維質をとりだしたという。さらには紙の原料や飼料としても利用されていた。また南アメリカのインカの人々はこの花を太陽神の化身と考え、祭壇や神殿にはこの花模様を刻み、神殿に仕える尼僧たちは胸にヒマワリの花をあしらったアクセサリーを付けていた。このためペルーでは国花とされ、アメリカのカンサスでも州花に指定されている。



子供の顔ぐらいあるヒマワリの花。種子からは油をとる。かつてヨーロッパではオリーブから油をとり、アメリカ大陸ではヒマワリから、中国ではゴマ、ナタネから、日本では椿だった。



このヒマワリ畑には、25万本以上のヒマワリが栽培されている(山梨県北杜市、旧明野村)。



この公園で『いま、会いにゆきます』の映画も撮影された。ここは南西斜面の高台になっており、日照時間が極めて長い。果樹を作ってもおいしいものが出るだろう(山梨県北杜市)。



このエリアは実は日本でも一番日照時間が長いのだという(山梨県北杜市)。

[目次に戻る](#)